

(第3種郵便物認可)

2009年も押し迫ってきた。そこで、09年にちなんだ話を書く。まずは、ガリレオ・ガリレイ。天体観測を通して「地動説(天が動いているわけではなく、地球自らが動いている)」を唱え、そのため、天動説を教義の一つとしていた当時のローマ教会との論争に巻き込まれ異端尋問を受けることになった天文学者。月にクレターや山があることを発見した最初の人類でもあった。09年は、そのガリレオの天体観測から400年にあたる。

今年2月から3月にかけて、三鷹の国立天文台の研究者たちと南部アフリカを回ったことがある。南十字星が夜空に輝く。そんな中で出合った言葉。



やまもと たろう  
山本 太郎

大地という揺りかご

「大地は人類の揺りかごである」。19世紀後半から20世紀前半を生きた数学者で、ロケット研究家

であったコンスタンチン・E・ツイオルコフスキーの言葉である。この言葉を聞いたとき、気持ち豊かなか豊かになった気がした。

揺りかごである大地、しかも人類揺籃(ようらん)の地であるアフリカでこの言葉を聞いたからかもしれない。すてきな言葉だと思った。その揺りかごの中にいるのだと思つた。その続きが「だが人はいつまでも揺りかごに入っているわけに

はいかない」と続くと聞いたとき、やはりそうなんだと思つた。未知の世界へ出て行くこと、人であり、生

物である限り、それを避けることはできないのかもしれないと思つた。

地質時代的に振り返ると、生物の適応放散は、生物が新たなニッチ(生態的地位)を得たときに爆発的に起こってきた。海というニッチを得たとき、陸というニッチを得たとき。とすれば、人類が揺りかごを出るときにも、何か、これまでも異なる世界観を得ることになるのかもしれない。それが何であろうとも、と思つた。

これから年末に向かい大気は透明度を増す。夜空を眺め「今、自分は大地という揺りかごの上に立っているんだ」と考えてみるのも悪くない。

(長崎大熱帯医学研究所教授)